

日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 東海地方会ニュース編集事務局
〒480-1195
愛知県長久手市岩作雁又1番地1
愛知医科大学医学部衛生学講座内
電話 (0561) 62 - 3580
FAX (0561) 62 - 3580
発行責任者 小林 章雄

(題字 皿井 進筆)



学会総合受付



ポスター発表会場

第85回日本産業衛生学会、8年ぶりに名古屋で開催される

第85回日本産業衛生学会企画運営委員長 小林 章雄 (愛知医科大学教授)



5月30日～6月2日に名古屋国際会議場で第85回日本産業衛生学会が開催されました。東海地方会が学会を担当するのは2004年の第77回学会以来のことです。今回の学会では、昨年震災直後で開催そのものも危ぶまれた第84回が緊急企画として震災を取り上げたのを受け、この震災を産業保健の立場からどう捉えるのかが問われていました。また、経済的にも厳しさを増している中、我が国の働く人々の健康問題を多面的に論じることも課題の1つでした。

これらの点を踏まえ、東海地方会では企画運営委員会を組織し、企画・運営に関わり、幅広い意見を積み、プログラムや開催要領の検討を重ねました。今学会のメイン企画には2008年ノーベル物理学賞を受賞された益川敏英先生に科学と社会の関わりから学問が果たすべき役割を広い視野から語っていただくとともに、基調講演・メインシンポジウムで学会のテーマである「希望！に満ちた労働と生活をサポートするために」について様々な立場、視点から論じることができました。

また、企画運営委員会から企画提案で行われたシンポジウム・パネルディスカッションが5本、学会研究

企画のシンポジウムが6本、学会ワーキンググループ企画によるパネルディスカッションが1本、教育講演2題、受賞記念特別講演2題、各部会フォーラム、地域交流集会、さらに学会期間中に2つの部会主催研修会、専攻医試験が開催されています。

学会の有料参加者は3,017人でした。今回、特別研修会を開催しませんでした。例年の学会・特別研修会合わせての参加者数とほぼ同じでした。機器展示・書籍展示していただいたのはそれぞれ44社、12団体、共催セミナーを開催していただいたのは11社、協賛金は17団体からいただきました。

東海地方会での学会を開催したことで、この地方の産業保健を学問的、実践的両面から一層の発展に結びつけることが求められます。今回の企画で大いに知恵を絞る中で産業保健が抱える課題が明らかになる一方、広い分野の方々との新たなつながりもできました。また、この分野の若い担い手にとって学会で受けた刺激はこれからの活動の原動力になるはずで

次回の学会開催を当地方会が担当するのは2020、年前後になります。このときまでに達成しておくべき目標を考えておくのも必要ではないでしょうか。第85回学会開催が当地方会の大きな発展の機会になることを期待しています。

第85回日本産業衛生学会 シンポジウム、パネルディスカッション報告

第 85 回日本産業衛生学会は東海地方会の担当で行われ、企画運営委員会を中心に現在の産業保健の実践・研究をめぐる様々な話題から会員の要求に合うものごと検討が重ねられ、いくつかのシンポジウム・パネルディスカッションを企画しました。これらの企画の責任者の方々、企画運営委員の方からの報告をお送りします。

シンポジウム 「メンタルヘルス不調者の労災認定と民事訴訟の現状と対策」を企画して

三菱重工（株）大江西健康管理科 石川 浩二



近年、自殺を含む精神障害の労災請求件数・認定件数は増加し続けている。また、電通事件に対する民事訴訟の最高裁判決では、自殺が企業側の安全配慮義務違反によるものと全面的に認められた。その後、労災認定のみならず、民事裁判でも企業側が敗訴する事例が増加し、企業にとって自殺を初めとする精神障害の発症は大きなリスク問題へと発展した。

今回、昨年 12 月に、「心理的負荷による精神障害の認定基準」（以下、新認定基準）が公表され、企業としてますます対策が必要となった。これらのリスクに対してどのような対策が必要か、という点について、有識者 4 名からご講演いただいた。

まず東邦大学精神医学講座の黒木宣夫先生から、精神障害の労災認定の推移と新認定基準について、説明頂いた。分かりやすくなったこと、認定されやすくなったことなどを説明し、一方でマニュアル化することで、こんな事例まで認定されてしまう、という事例も提示しながら、その問題点やリスクについても指摘された。続いて、日立製作所の産業医の林剛司先生からは、適切に対処していれば裁判を防げた事例と、努力しても裁判は防ぐことができなかった事例を提示しながら、今回のテーマに沿って、会社、産業保健スタッフがすべきことをその限界も含めてまとめられた。また新認定基準で、発病者の悪化も認定されうるようになった点について、「覚解」が今後のポイントになるとの考えも述べられた。

帝京平成大学の北村尚人先生は、企業の心理相談員としての長年の経験をもとに、今回のテーマについて、産業保健スタッフと人事労務担当者の連携の重要性を説明された。一方で、企業は福利厚生よりリスク管理を重視し、その結果従業員の満足度の低下につながる

危険性についても触れられた。

最後に近畿大学法学部の三柴丈典先生からは、諸外国との比較をしながら日本の裁判所の考え方の実態を説明された。また、著書の「裁判所は産業ストレスをどう考えたか」の骨格に沿いながら、企業が民事裁判、労災対策として何をすべきかについてまとめられた。その後活発な質疑応答が行われ、締めとして、一緒に座長をして頂いた三菱電機の富田晃行先生が、法遵守がいかに重要か、ということを中心にまとめられた。今後、労災認定されうるような事案を発生させない、また裁判になっても安全配慮義務違反と認められないような体制作りを進めていくことが必要と思われる。

パネルディスカッション 「新たな産業保健の担い手となりうるか？ ～外部専門機関の理想と現実～」

大同特殊鋼（株） 斉藤 政彦



「外部専門機関」は、労働者のストレスチェックを義務付ける労働安全衛生法の改訂を前提に、事後の受け皿として浮かび上がった構想です。諸事情から法案通過が遅れ、さらに当初、法第 13 条（産業医選任規定）の改訂もあり得るという大掛かりなものが、その後産業医制度に変更のない省令対応レベルへとトーンダウンしたことも重なって、注目度が低下して参加者数や議論の盛り上がりが高く懸念されましたが、予想以上に多くの方に参集いただき、かつ活発な議論がなされました。

現行の産業保健制度の骨格ができあがった昭和 47 年の安衛法制定当時からは、社会も企業も、さらに職場における疾病構造も大きく変化しました。特にグローバル化に伴い労働者のストレスが増大して、産業保健のニーズが大幅に増え、その一方で医師不足もあって産業医が期待に答えていないという現実があり

ます。その解決方法として外部専門機関構想が提案されました。各パネリストにそれぞれの立場から現状の問題点を挙げてもらい、対策を外部専門機関も絡めて述べていただき、議論しました。

専属産業医の宮本先生は、下請け企業の従業員の健康管理を外部専門機関と協力して行うことが可能と述べられました。五十嵐先生は産業看護職が特に小規模事業場の問題解決に活躍の余地が大きいと強調されました。健診機関所属の武藤先生からは、看護職と連携して特殊健診結果を元に職場環境改善へ取り組んでいる事例を報告してもらいました。日野先生は、外部専門機関は本来独立系産業医の目指すところで、近未来的な産業保健体制のあるべき姿と、熱く語ってくれました。織田先生は、縮小を余儀なくされている産業保健推進センターのむしろ充実が必要と訴えられました。

討論は、労働者の過半数を占める 50 人未満の小規模事業場への対応を中心になされました。経営基盤が脆弱なため、公的サポートが必要で、その意味で外部専門機関は有用と考えられます。一方で、企業が主体的に取り組むようにしむける仕組みがないと機能しません。企業内で中心的に取り組む衛生管理者の育成と活用が大切といえそうです。いずれにしろ産業医だけでなく、産業看護職や衛生管理者などの多職種連携協力が不可欠という結論でした。ストレスチェックの法案が通れば、再び注目を集めるであろう外部専門機関は、将来あるべき産業保健体制を考える上で、今後さらに議論を深めていくべき課題と思われま

シンポジウム 「メンタルヘルス対策としての良質な睡眠への新たな戦略」を企画して

浜松医科大学 医学部看護学科 巽 あさみ



今回の第 85 回日本産業衛生学会において、シンポジウム「メンタルヘルス対策としての良質な睡眠への新たな戦略」を企画させていただいた。当日はサテライト会場が用意されるほど多くの参加者があり、「メンタルヘルス」、「睡眠」「睡眠保健指導」というキーワードに、産業分野の健康支援において強い関心をお持ちの方が多いと推測された。

本シンポジウムにおける「新たな戦略」と

は、「睡眠障害を切り口としたメンタルヘルス対策」である。それは産業保健における予防対策において、第一次予防としての睡眠公衆衛生、第二次予防としての早期発見・早期保健指導や治療、三次予防として、リワークプログラムなどにおける良質な睡眠を確保するための指導などの展開で中心的な役割を果たせるのではないかということが 4 人のシンポジスト達の主張であり、フロアーからも納得された旨の意見があった。

その中で、「通勤電車中の居眠りは、帰宅後の不眠につながり、就寝が夜中にずれ込んで睡眠不足になる」や、「交代勤務者の良質な睡眠の確保のしかた」について議論があった。

通勤電車中の居眠りについては、通勤時間が長いという都市部の労働者の生活を反映しており、長時間労働以外にも生活時間を見ていくことの重要性が示唆された。眠らない時間が蓄積していないと熟睡することができないので、本来は眠らない方が良いのだがそういうわけにいかない。通勤時間帯に熟睡するのでなければウトウトすることは大丈夫だという内村先生からの説明があった。また、交代勤務者の睡眠については、夜勤の回数を減らしたり、シフトの種類によっては、昼夜逆転型の生活リズムにしたりすることで、より良質な睡眠が得られるとの意見があった。また、シンポジストの発表の中で、睡眠満足度と長時間労働の関連において、「残業が 80 時間未満の者では残業時間が増えるほど睡眠満足度が低い者が増加していくが、80 時間を超えると反対に減少する」という報告があり、長時間残業者は、睡眠の自己管理が上手いのではないかという意見が出た。

このような議論より、産業保健スタッフが睡眠を切り口にしたメンタルヘルス対策をより有効に実践するためには、①労働者の労働時間だけでなく全体の生活時間をみること、②良質な睡眠を確保可能な交代勤務者等シフト体制の知識を有すること、③睡眠に影響を与える残業時間管理への対応、等の必要性があることが示された。そして、支援にあたっては労働者自身に睡眠管理能力を身につけてもらうことの重要性が共有化された。

しかし、以上の①②③に関しては既に産業保健スタッフには求められている職務である。

また、保健師等看護職に対しては保健指導のスキルを既に持っている職種であることから、睡眠を切り口としたメンタルヘルス対策としての睡眠保健指導に積極的に関わっていってくれることを期待するものである。

今後の課題としては、メンタルヘルス対策として「睡

眠」の重要性をより多くの産業保健スタッフに認識してもらおうことと、良質な睡眠への行動変容に結びつける効果的な保健指導方法を開発していくことである。

パネルディスカッション 「日本産業衛生学会における利益相反マネジメントを考える」に参加して

椋山女学園大学看護学部 西谷 直子



特に海外の雑誌に論文を投稿する際や学会で研究成果を発表する場合は、現在その多くの場合において、利益相反 (conflicts of interest) に関する内容の申告が求められています。もと

もと利益相反とは、研究者個人の利益と公共の利益が互いに相反することを意味しています。例えば、産学共同研究で、ある会社などから多額の研究費を支援されている研究者が、その研究の成果としてできた製品の副作用について事例があったにもかかわらず、自分の研究業績を重視して副作用を隠してしまう場合などがこれに該当すると考えられます。このような場合において副作用を報告することは、公共の利益にとっては重要な事柄となります。各研究者や研究機関は、この利益相反について十分な理解と適切に管理していく仕組みづくりが重要であると考えられます。医学研究に関する国際的な倫理指針である「ヘルシンキ宣言」では2002年に利益相反に関する項目が追加されています。また日本でも特に最近この問題に関して、研究者の申告を求め、それを基に適切に管理するよう求められてきています。このような意味合いから今回のパネルディスカッションのテーマは重要であり、今後の方向性を探るうえで本学会において大切な役割を果たすものと考えられました。その意味で関心を持って参加しました。この学会における利益相反の内容を考える際には、ディスカッションの中でも言われていたように大きく次のような点を考える必要があると思われま。1. 学会発表や論文投稿及び発表時の申告と開示の問題、2. 利益相反の指針について、3. 学会員やその所属団体の十分な理解と管理の徹底といったような内容です。本学会は、研究者のみの学会ではないこと、企業に属する人が多いこと、所属機関をフィールドとして調査研究する機会が多いことなどいくつかの特徴が挙げられ、それらは今回の議論の中でも意見が交わされたように、利益相反の問題を理解し

難しくする可能性を含んでいます。このような学会員の特性があるとしても、今後この問題を適正に取り扱っていく必要性や重要性は非常に高いと考えられます。今回のディスカッションはその意味でタイムリーなきっかけづくりになったと感じました。まずはこのようなディスカッションの機会を多く持ち、それぞれの学会員が利益相反に関して同じような理解を深めることが何より重要であると感じられました。それと同時に学会としての指針づくりや専門的委員会の設立に向け動き出すことが必要ではないでしょうか。そして当り前ですが、研究を行う者一人一人が研究に対して真摯に向き合うことが何より大切ではないかと感じさせられました。

シンポジウム「大震災から産業保健が学ぶもの」報告

企画・座長

ブラザー工業㈱健康管理センター 産業医 上原 正道

浜松医科大学健康社会医学講座 尾島 俊之



東日本大震災は産業保健にとって大きなできごとでした。特に、中長期的に産業保健が果たすべき役割は大きいと考えられました。次に大震災が起きた場合に、産業保健はどのような役割を果たしていけばよいか、そのためには今から何を準備しておく必要があるかを考えるために、まず下記の4人の先生方に報告を頂きました。

複合負担への産業医活動と石綿・粉じん等への対策

広瀬 俊雄 (仙台錦町診療所・産業医学センター)



震災の被災者としての個人や家庭での負担に加えて、事業所での震災・復旧のための過重労働という複合負担が大きな問題でした。家庭での被災状況なども考慮したそれぞれの労働者の限

界をふまえた労務管理や、予見・予防的な視点に立脚した産業保健活動が必要です。その他の課題として、石綿、ヘドロ等の粉じん、それらの吸入予防のためのマスク装着なども重要な課題です。

意味化が必要であると考えられます。

その後のフロアを含めての総合討論では、福島県で職員として活動された方からの当時の体験についての発言もありました。このシンポジウムの企画及び座長は、尾島俊之 (浜松医科大学) と上原正道 (ブラザー工業) が担当いたしました。

メンタルヘルスクアを含めた大震災時の専門職の役割

池田 智子 (産業医科大学産業保健学部)



被災者は一年たった今でも、やり場のない怒りや漠然とした不安を抱え、途方に暮れています。震災後に高血圧となった例なども見られました。災害時には日頃の係わりがものを言い、元

からあった課題が顕在化します。また、当事者側より支援活動に対する不信感が起こる場合もありました。今後必要な支援としては、個別ケアや、他職種の連携が重要であると考えられます。

行政職員の心身を支える活動

崔 炯仁

(京都府精神保健福祉総合センター, 京都府立医科大学大学院 精神機能病態学)



福島県において、避難所に寝泊まりしながら1日も休まず昼夜を問わず住民対応を続けた職員が数多く存在し、業務の抱え込みや、自責傾向などが見

られました。そこで、県医師会長名で知事及び市町村長宛に、職員の心身ケアのための緊急文書を出して頂きました。また、個別対応では心の蓋を丁寧に開けるアプローチを行いました。

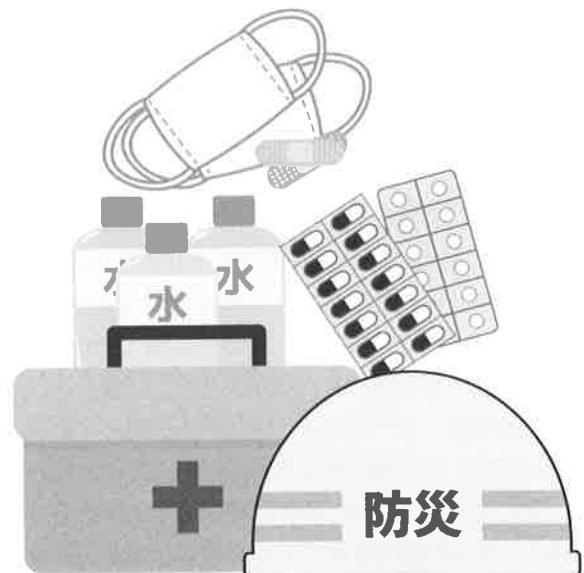
災害ボランティア・被災者の復興活動の安全衛生

武藤 香織 (東京大学医科学研究所公共政策研究分野)



都民ボランティア事業に一都民として参加しました。活動中に、釘の踏み抜き、ガラスが刺さるなどの事故がありました。また、住民からの不信感や叱責の表出、人間関係によるストレス

など精神衛生の課題もありました。今後は、平時から専門職との関係づくり、災害ボランティアから得る被災者等に関する情報の利活用、ボランティア経験の有



追悼 岩井 淳先生



岩井先生を偲んで

愛知医科大学産業保健科学センター 渡邊美寿津

岩井淳先生が6月16日（土）、享年86歳でご逝去されました。

岩井先生は、名古屋大学予防医学教室のご出身で、昭和36年から三菱重工(株)名古屋航空機製作所に産業医として勤務され、昭和63年に同勤労部主管の職を辞され、その後は、全日本労働福祉協会で職域の健康管理にご尽力されました。

先生は、私が初めて三菱重工の産業医として赴任した、三菱自動車・岡崎工場の先輩産業医でした。産業保健の知識を全く持たない未熟者の私に、職場巡視の大切さや、産業医としての言動には注意が必要であること、その他にもさまざまな現場に根づいた知識をお教えました。先生にマンツーマンで教えていただいたことは、私にとって今でも欠かせない貴重な宝です。

また自宅にお招きいただき、知り合いの保健師さんたちと一緒に奥様の手料理をごちそうになりました。岩井先生は、皆んなとわいわいお話しするのがお好きで、産業医の資質に溢れた、公平で明朗、ご関連で心の温かい先生でした。

岩井先生は、多方面でご活躍されたご高名な先生でもあります。日本産業衛生学会功労賞、労働大臣功績賞、愛知労働局功績賞、中央労働災害防止協会緑十字賞など、多くの賞を授与されています。また東海地方会にあっては、地方会NEWS第1号～28号の編集

責任者として、また、産業医・産業保健婦・産業看護婦・衛生管理者のための研修会（現在は、産業保健スタッフのための研修会に名称変更）では、長年にわたり企画運営に携わって来られました。ノリタケの故加藤竹男先生、三菱電機の故森川利彦先生、東海銀行の飯田英男先生、大同特殊鋼の小森義隆先生、中部電力の出原汎先生、トヨタの故入谷辰男先生らとともに、愛知県産業医懇談会を結成され、この地方の産業保健分野における学究的活動を支えてこられました。

最後にお会いした時、先生はいつもとお変わりのないご様子で、尿路腫瘍のことを打ち明けられました。先生は笑顔でにこやかに「大変ですよ、しょうがないんだけど」と言いながら、「自分の体でどこまで長く生きることができるかやってみたい。」と仰っていました。

誠実に、そして奥様とともに懸命に生きてこられた先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



地方会ニュース編集委員長時代、委員とともに（1993年）



研究会で座長を務める岩井先生

平成23年度総会決議から

平成22年度事業報告

平成22年度活動報告

1. 総会を2010年6月25日(金)に名古屋市で開催した。

2. 理事会を4回(2010年6月19日、9月11日、12月4日、2011年2月12日)開催した。

3. 各部による活動を以下のように実施した。

1) 学術・国際部

(1) 平成22年度日本産業衛生学会東海地方会学会を浜松市で以下のように開催した。

日 時：2010年11月13日(土)
10:00～17:00

場 所：浜松医科大学医学部 講義実習棟
特別講義室、201 講義室

学会長：巽あさみ(浜松医大医学部看護学科
地域看護学講座 教授)

一般演題 20題

特別講演「職場のメンタルヘルス 最新の効果的な
職場復帰支援のあり方」

廣 尚典

(産業医大産業生態科学研究所精神保健
学研究室)

シンポジウム「職場のメンタルヘルスクエア～事業場内産
業保健スタッフ「力」、もっと結集でき
ないか?!～」

1. 「嘱託医として産業看護職に期待すること」

渡邊美寿津

(愛知医大 産業保健科学センター)

2. 「大規模事業場におけるメンタルヘルス活動」

松下裕子

(東海旅客鉄道静岡健康管理センター)

3. 「一人職場におけるメンタルヘルス活動」

奥柿智子

(ブリヂストン・エラストック株式会社)

4. 「労政企画・健康安全の観点から看護職に期
待すること」

星宮宏光(ヤマハ株式会社)

指定演者：井上朋子(静岡県農業団体健康保険組合)
住吉健一

(旭化成株式会社 富士支社健康管理センター)

参加者数：246名(会員126名、非会員103名、
学生・他17名)

(2) 研究会活動を以下のように実施した。

①第24回振動障害研究会

日 時：2011年2月26日(土)
13:30～16:30

会 場：名古屋大学医学部保健学科 本館1階
THPセミナー室

演 題：1. 防振型電動生垣バリカンの評価
蜂須賀智弘

(株)マキタ 開発技術本部 技術研
究部)

2. 防振型インパクトレンチの開発

中村晃規、砂坂 優

(株)空研 野工場技術部)

3. EUでの振動障害予防対策の現状－
イギリス訪問報告

大西哲史

(全日本建設交通一般労働組合)

4. 中国熱帯地域(広東省)工場労働者
に起こした振動障害の事例報告

王 海蘭(中国広東省職業病防治院)

参加者数：22名

②職場ストレス研究会

78回

日 時：2010年7月14日(水)
14:00～16:00

会 場：明倫ホール(名古屋市中区)

テーマ：「自傷行為への理解と援助」

講 師：松本俊彦

(国立精神・神経医療研究センター 精
神保健研究所)

参加者数：51名

第79回

日 時：2010年11月24日(水)
14:30～16:30

会 場：明倫ホール(名古屋市中区)

テーマ：「睡眠と健康」

講 師：篠邊龍二郎(愛知医大病院睡眠科 准教授)

参加者数：51名

第80回
 (第52回産業精神衛生研究会 合同開催)
 日 時：2011年2月20日(日)
 9:30～17:00
 会 場：ウイंक愛知(名古屋市中村区)
 テーマ：「明るく元気な職場をめざして」
 参加者数：141名

③学術連携研究会

第3回産業衛生 学術研究討論会
 日 程：2010年11月27日(土)
 13:00～16:00
 会 場：名古屋市立大学医学研究科・医学部研究
 棟11階講義室B
 内 容：
 第一部：アンケート調査報告：
 日本ガイシ 中元健吾
 第二部：「産業現場でエビデンスを創る」—大学
 研究機関との連携を中心に—
 講 師：大阪ガス 統括産業医 岡田邦夫
 第三部：全体討論
 参加者：20名

2) 事業部

(1) 平成22年度日本産業衛生学会東海地方会総会並
 びに研修会を名古屋市で以下のように開催した。

日 時：2010年6月25日(金)
 9:30～17:45
 会 場：東建ホール・丸の内(名古屋市中区)
 企画運営委員会代表：
 山田琢之
 (なごや労働衛生コンサルタント事務所)
 プログラム：
 教育講演1 「職域における過敏性腸症候群の基礎知
 識と対応」
 金子 宏
 (藤田保衛大坂文種報徳會病院・神経
 内科 教授)

東海地方会総会

教育講演2 「産業保健におけるメタボリックシンド
 ローム対策—ライフスタイルは変えら
 れるか」
 廣部一彦
 (みずほFG大阪健康開発センター所長)

特別講演 「これからの産業医を考える」—産業医
 の継続的かつ体系的な育成に関する研

究より—」
 森 晃爾
 (産業医大産業医実務研修センター所長)
 教育シンポジウム「産業保健分野への人間工学の応用—
 作業管理・産業保健人間工学の実践」
 神代雅晴
 (産業医大産業生態科学研究所教授)
 榎原 毅
 (名古屋市立大院医環境保健学講師)
 赤津順一
 (中部電力浜岡原子力総合事務所)
 金 一成(トヨタ自動車上郷工場)

参加者数：221名

(2) 第25回産業保健スタッフのための研修会を企画
 準備した。

日 時：2011年3月5日(土)
 10:00～16:50
 場 所：名城大薬学部ライフサイエンスホール
 プログラム：
 講 演「無関心期社員への禁煙アプローチ—産業
 保健スタッフに必要なスキル」
 名古屋医療センター 禁煙外来専任看護師
 谷口千枝
 指定発言 愛知学院大歯学部口腔衛生学
 准教授 加藤一夫
 講 演「双極性障害による休職者の復職支援～双極Ⅱ
 型障害のリワーク・プログラムを中心に～」
 仁大クリニック院長 奥山真司
 講 演「過重労働と労働時間」
 三重大医公衆衛生産業医学分野 教授
 笹島 茂
 講 演「様々なうつ状態の鑑別と対応の理解～職場
 の心理・社会的不適応者支援のために～」
 愛知淑徳大学心理学部 教授 古井 景
 参加者数：224名

4. 各部会による活動を以下のように実施した。

1) 産業医部会

①第6回東海産業医部会懇話会

日 時：2010年6月19日(土)
 14:00～17:00
 場 所：中部大名古屋キャンパス6階610講義室
 内 容：「職場改善演習—CDを活用して」
 産衛学会編集「職場改善セミナー教材」
 を使用

事例提示：1. S 工業事例（製鉄所整備作業場）；
 斉藤政彦（大同特殊鋼産業医）
 2. ST 社（高圧配管加工場）；
 金 一成（トヨタ自動車産業意）
 グループ討議後、作業や作業環境に潜
 む危険を洗い出し、改善提案を提示

参加者数：16 名

②第 25 回産業保健スタッフのための研修会の企画
 準備に協力した。

2) 産業看護部会

①6 回シリーズ研修会「統計解析」

日 時：2010 年 6 月 12 日、7 月 3 日、
 9 月 4 日、10 月 2 日、11 月 6 日、
 12 月 4 日

場 所：愛知産業保健推進センター

講 師：杉本日出子

(株)ジェイテクト安全衛生環境部

参加者数：延べ 133 名

②産業看護職継続教育システム短縮 N コース(主催：
 愛知産業保健推進センター)に協力した。

参加者数：延べ 160 名(内、全科程終了者 12 名)

③第 25 回産業保健スタッフのための研修会の企画
 準備に協力した。

3) 産業衛生技術部会

①東海産業衛生技術部会第 2 回講演会

日 時：2011 年 2 月 26 日(土)
 13:00 ~ 16:00

場 所：名古屋市立大学医学部研究棟 11 階講義
 室 A

講演 1：「化学物質管理の今後の方向」

名古屋俊士（早稲田大学理工学部）

講演 2：「今後の労働衛生管理の方向と衛生管理
 者の役割」

斉藤政彦（大同特殊鋼星崎診療所）

参加者数：26 名

②第 25 回産業保健スタッフのための研修会の企画
 準備に協力した。

4) 産業歯科部会

①第 5 回産業歯科部会研修会

日 時：2010 年 11 月 28 日(日)
 10:00 ~ 12:00

場 所：愛知学院大歯学部楠元校舎第 2 会議室

内 容：「産業歯科保健」なんでも討論

参加者数：6 名

②第 25 回産業保健スタッフのための研修会の企画
 準備に協力した。

5. 役員選挙

2010 年本部役員選挙ならびに地方会役員選挙を
 実施し、新役員・役員候補を選出した。

6. 地方会ニュース編集委員会

地方会ニュースの発行(78 号)を行った。

7. 東海地方会ホームページの運営

事務局の管理で UMIN に設置したホームページ
 の運営を行い、地方会関連行事、理事会の案内な
 どを行った。(http://tosh-net.umin.jp/)

8. 第 85 回日本産業衛生学会(平成 24 年度)の準備
 企画運営委員会(企画運営委員長：小林章雄)を
 組織し、会場：名古屋国際会議場、会期：2012
 年 5 月 30 日(水) ~ 6 月 2 日(土)の予定で準備
 を進めた。

平成 24 年度総会決議から

平成 23 年度事業報告

1. 総会を 2011 年 6 月 25 日(土)に静岡市で開催
 した。

2. 理事会を 4 回(2011 年 6 月 11 日、9 月 10 日、
 12 月 17 日、2012 年 2 月 11 日)開催した。

3. 各部による活動を以下のように実施した。

1) 学術・国際部

(1) 平成 23 年度日本産業衛生学会東海地方会学会を
 豊明市で以下のように開催した。

日 時：2011 年 11 月 5 日(土)
 10:00 ~ 16:10

場 所：藤田保健衛生大学 生涯教育研修センター、
 フジタホール 500 (愛知県豊明市)

学会長：小野雄一郎(藤田保健衛生大学医学部 公

衆衛生学講座 教授)

企画:
一般演題 18題

特別講演1「勤労者のメンタルヘルスにおける睡眠と体内リズムー早期発見・治療への応用」
北島剛司(藤田保衛大医学部精神神経科学 准教授)

特別講演2「双極性障害のリワークの実際ー社会リズムへの介入と集団での心理教育ー」
奥山真司(仁大クリニック 院長)

特別講演3「職場で注意が必要な皮膚アレルギーの知識と対策」
松永佳世子
(藤田保衛大医学部皮膚科学 教授)

参加者数:152名(会員94名、非会員56名、学部学生2名)

14:30~16:00

会場:明倫ホール(名古屋市中区)

テーマ:「若年者への心理教育的アプローチー「思春期とエイズ」を通して学ぶー」

講師:岩室紳也(公益社団法人 地域医療振興協会 ヘルスプロモーション研究センター センター長)

参加者数:28名

第83回

日時:2011年11月16日(水)

14:00~16:45

会場:明倫ホール(名古屋市中区)

内容:「発見的体験学習法を用いたアクティブライسنラー研修」

講師:巽あさみ
(浜松区大医学部地域看護学教授)

参加者数:28名

(2) 研究会活動を以下のように実施した。

①第25回振動障害研究会

日時:2012年2月4日(土)
13:30~16:30

会場:名古屋大学医学部保健学科 本館1階 THPセミナー室

演題:ISO/TC108/SC4の最近の動向
前田節雄(近畿大総合社会学部 教授)

2. ISO 準拠の振動覚計の開発
吉川教治(リオン㈱取締役 上席執行役員 R&Dセンター長)

3. 工具振動値の公表と振動暴露管理
榎原久孝(名古屋大医学部保健学科 教授)

参加者数:23名

②職場ストレス研究会

第81回

日時:2011年4月20日(水)
14:00~16:00

会場:明倫ホール(名古屋市中区)

テーマ:「名古屋市における自殺予防対策と取り組みの現状」

講師:高倉 敦・野口孝子
(名古屋市健康福祉局障害福祉部障害企画課)

参加者数:21名

第82回

日時:2011年7月27日(水)

③学術連携研究会

特別講演会

日程:2011年11月5日(土)
16:20~17:20

会場:藤田保衛大学 フジタホール500

テーマ:「産業看護職として学会活動を実践するために ~産業看護職の歴史的経緯を踏まえて~」

講師:和田晴美
(日本産業衛生学会産業看護部会)

参加者:34名

2) 事業部

(1) 平成23年度日本産業衛生学会東海地方会総会並びに研修会を静岡市で以下のように開催した。

日時:2011年6月25日(土)
10:00~16:30

会場:ホテルアソシア静岡 駿府I(静岡市葵区)

企画運営委員会代表:
遠田和彦
(東海旅客鉄道㈱静岡健康管理センター 所長)

プログラム:
特別講演I「職場全面禁煙に向けて」

- 1) 静岡県内事業場の全面禁煙に向けた実態調査報告
- 2) 全面禁煙事業場からの事例報告
- 3) 講演「職場全面禁煙が求められる5

つの理由]

倉田千弘

(ヤマハ健康管理センター 所長)

特別講演 II 「産業保健スタッフのためのエビデンス
に基づく緑茶の効果」

栗山進一 (東北大院医学系研究科 環
境遺伝医学総合研究センター・分子疫
学分野 教授)

ワークショップ (グループディスカッション)

「中小事業場における有病労働者の就労に関する
事例検討会 ～生活習慣病関連 2 事例に対する
実践的検討～」

コーディネーター:

堤 明純

(産業医大産業医実務研修センター 教授)

コメンテーター:

福地康紀

(静岡市静岡医師会理事 産業医部会担当)

武藤繁貴 (聖隷健康診断センター 所長)

巽あさみ (浜松医科大学医学部地域看護学 教授)

石川俊二

(新幹線メンテナンス東海㈱取締役企画部長)

参加者数: 161 名

4. 各部会による活動を以下のように実施した。

1) 産業医部会

①第 85 回日本産業衛生学会の企画準備に協力し
た。

2) 産業看護部会

①6回シリーズ研修会「統計解析: 健康管理データ
活用法」

日 時: 2011 年 6 月 10 日、7 月 8 日、
9 月 3 日、10 月 28 日、11 月 25 日、
12 月 10 日

場 所: 愛知産業保健推進センター

講 師: 杉本日出子 (㈱ジェイテクト安全衛生環
境部)

参加者数: 延べ 85 名

②産業看護職継続教育システム短縮 N コース (主催:
愛知産業保健推進センター) に協力した。

参加者数: 延べ 185 名 (内、全課程終了者 19 名)

本部会員の異動 (2012.6.1 ~ 8.31)

(1) 新入・再入会員

愛知①陣内 伸子 (河村電器)

②山田裕紀子 (三菱電機)

③赤羽 和久 (愛知県がんセンター愛知病院)

④森本 裕己 (犬山病院)

⑤甘利 淳 (日進おりど病院)

⑥高橋 秀平 (名大)

⑦内山 靖 (名大)

⑧後藤 俊介 (足助病院)

三重①伊藤真祐美 (住友電装)

②島田 理子 (住友電装)

③山岡 祐輝 (ナベル)

岐阜①田中 生雅 (岐阜大)

②木戸 内清 (岐阜県東濃保健所)

(2) 転入会員

愛知①高橋麻希子 (中部空港検疫所支所) (関東より)

②安藤 昌彦 (名大) (近畿より)

③阿部 桂大 (関東より)

静岡①伊藤 直人 (JR 東海) (九州より)

②森田いづみ (トヨタ自動車東日本) (東北より)

三重①河野 啓子 (四日市看護医療大) (関東より)

岐阜①船越 弥生 (岐阜市立女子短大) (九州より)

(3) 退会会員

愛知①荒木 光子 (あまの創健)

②田中真希子 (大同特殊鋼)

静岡①武田弥千代 (富士フィルム)

三重①草川 真弓 (富士通セミコンダクター)

岐阜①田中 春仁 (岐阜メイツ睡眠障害治療クリニック)

(4) 転出会員

愛知①三好瑠美子 (JR 東海) (近畿へ)

②内海 恭子 (トヨタ紡織) (近畿へ)

③高西 敏正 (九州へ)

④徳留 信寛 (関東へ)、

⑤正木みゆき (中部空港検疫所支所) (近畿へ)

⑥今井 順一 (九州へ)

⑦牧 祥 (愛教大) (近畿へ)

静岡①光山 元章 (日本郵政) (関東へ)

これからの行事予定

(2) 本部関連学会・研究会等

①第86回日本産業衛生学会

日程：2013年5月15日(水)～17日(金)、
特別研修会：18日(土)

会場：ひめぎんホール(愛媛県県民文化会館、
松山市)

企画運営委員長：谷川 武
(愛媛大学大学院医学系研究科)

メインテーマ：産業保健における可能性の追求

ホームページ：<http://jsoh86.umin.jp/>

②第23回産業医・産業看護全国協議会

会期：2013年9月25日(水)～28日(土)

会場：名古屋国際会議場(9月26日～28日)
(愛知教育大学 9月25日 四部会合同セミナー)

テーマ：連携、そして発展！産業保健の未来を問う

(3) その他の学会・研究会等

①第6回ICOH 仕事と心血管疾患に関する国際会議

日程：2013年3月27日(水)～30日(土)

会場：北里大学白金キャンパスコンベンション
ホール(東京都港区白金5-9-1)

会長：堤 明純(北里大学医学部公衆衛生学)

東海地方会代議員選挙当選者

10月に投票が行われた学会代議員選挙で以下の
方々が当選されました。(各県五十音順)

愛知県		
赤松 康弘	飯田 和子	石川 浩二
市原 学	市丸 麻衣子	伊藤 由起
岩田 全充	上原 正道	浦上 年彦
榎原 毅	小野 雄一郎	加藤 隆康
金山 敏治	上島 通浩	五藤 雅博
斉藤 政彦	酒井 潔	榊原 久孝
榊原 洋子	柴田 英治	白石 知子
杉本 日出子	竹内 康浩	城 憲秀
塚田 月美	寺澤 哲郎	富田 晃行
中元 健吾	那須 民江	西谷 直子

久永 直見	村崎 元五	八谷 寛
山本 美幸	吉田 勉	和田 しおり
渡邊 美寿津		

静岡県		
青山 京子	赤津 順一	足立 留美子
池田 友紀子	上原 明彦	内野 文吾
遠田 和彦	大久保 浩司	尾島 俊之
倉田 千弘	杉 敏彦	住吉 健一
巽 あさみ	土屋 眞知子	新島 邦行
西 賢一郎	武藤 繁貴	山本 誠

岐阜県		
井奈波 良一	梅津 美香	片倉 和子
黒川 淳一	牧野 茂徳	

三重県		
加藤 桂三	河南 文子	後藤 由紀
後藤 義明	酒井 秀精	笹島 茂
高崎 正子	松田 元	村田 真理子

編集後記

今年度の東海地方会は第85回日本産業衛生学会の準備とともに、本番での企画運営委員会企画のシンポジウム・パネルディスカッションの運営、一般口演会場の管理などに追われました。来年度はまた、第23回産業医産業看護全国協議会の担当が決まり、斉藤政彦企画運営委員長を中心に企画の検討が行われています。これらの全国的な会議の担当を、東海地方会の産業保健研究・実践活動発展のチャンスにしたいものです。

さて、この東海地方会ニュースは昨年度は一度も発行することができず、皆様に大変なご迷惑をおかけしました。この第79号は2年分の活動報告を掲載するという異例の内容になってしまいました。ニュースの発行には大変な労力が必要ですが、事業所でも大学でも最近では以前と比較にならないほど忙しくなり、多数の編集委員が集まって、何度も編集会議を開くことは難しくなっています。今後、ニュース編集を効率的に進める方法を検討しながらの発行になりそうです。